

○逸見龍生

- ・「文人たちの結社」, 『図書』(岩波書店), No. 780, 2014年2月, 2-7頁
- ・「『百科全書』の日時計—宇宙の理を希求する」, INAX ライブミュージアム編『手のひらの太陽—「時を知る, 一を知る, 姿を残す」道具—」, 2014年4月, 30-32頁
- ・逸見龍生・王寺賢太・田口卓臣, 鼎談「今, デイドロを読むために」, 『思想』(岩波書店), 2013年12月号, 6-48頁

○三浦淳

- ・「シュトルムと私」, 『日本シュトルム協会会報』, 第60号, 32-33頁, 2013年5月
- ・「新潟ドイツ映画祭に寄せて—多様性の一端触れて」, 『新潟日報』, 2013年10月9日, 第18面
- ・「映画『ハンナ・アーレント』上映に寄せて—ユダヤ人の多様な思想」, 『新潟日報』, 2014年2月13日, 第10面
- ・「甲信越地区研究会概要(新潟)」, 日本言語政策学会『言語政策』, 第10号, 2014年3月, 200頁

世界の視点をめぐる思想史的研究

研究代表者 栗原 隆

人文学部プロジェクトとしての、「世界の視点をめぐる思想史的研究」は、思想史における隠れた水脈を掘り起こすべく、知られてこなかった重要な文献を翻訳して紹介する『知のトポス』の刊行を中心に、人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」における研究活動とも相俟って、公開研究会を開催することを軸に展開されている。

1. 研究会

1-1: 2013年度は、新潟大学人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」の共催という形で、「日本シェリング協会」第22回大会を招致して、40人余りの参加のもと、本学が研究拠点であることを実証した。内容は下記の通りである。

2013年7月6日（土）新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」

14:40~15:20 一般発表：福元隆文「シェリング自然哲学とフロギストン説」

15:30~16:30 特別報告：栗原隆「ファンタジーの射程とムネモシュネーの深み」

16:40~17:40 特別講演：新潟大学名誉教授・深澤助雄「生成する神——『人間的自由の本質』を読む」

7月7日（日）

10:00~12:00 テーマ討論：高山守・原田哲史「自由の可能性」

13:00~16:30 シンポジウム：江口大輔・橋爪恵子・八幡さくら「構想力（想像力）」

1-2: 11月27日（水）にも、新潟大学人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」主催の国際シンポジウムを開催、研究成果の国際発信に努めた。内容は下記の通りである。

Symposium: Zu der Forschung der Frühzeit des deutschen Idealismus

11月27日（水）新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」

13:10~13:50: Bericht

Takashi KURIHARA (Niigata Universität): Über empirische Psychologie und Anthropologie — Der Geburtsort des transzendentalen Idealismus um „Propädeutik

14:00~18:00: Symposium

(14:00~15:20)

Daniel Breazeale (University of Kentucky) : Against Conscience? — A Fichtean rejoinder to the Hegelian Criticism

(15 : 30~16 : 50)

George di Giovanni (University of McGill) : The Moses Mendelssohn/Thomas Abbt's Dispute of 1784 — An Episode in the Late Enlightenment's Debate on the Vocation of Humankind

(17 : 00~18 : 00)

Diskussion

1 - 3 : 恒例の「ヘーゲル・アーベント」を開催した。本来なら、ヘーゲルの命日である11月14日に開催してきたが、2013年度は11月22日(金)18時から、総合教育研究棟F棟5階「人間学PS」にて、栗原隆が「経験的心理学と人間学を超えて——『導入教育』をめぐる超越論的観念論の出自」を報告した。

1 - 4 : 新潟大学人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」の研究会に参加した。内容は下記の通りである。

12月19日(木) 総合教育研究棟「F370B」

17 : 00~19 : 00

栗原隆「物語の内在化と心の表出——ドレスデン探訪に寄せて、ヘーゲルにおける絵画論の成立を考える——」

江畑冬生「言語——身体が生み出し、心を伝える」

2. 『知のトポス』の刊行

2014年3月21日に刊行された『知のトポス』Nr.9の内容は、下記の通りである。本号も貴重な文献を邦訳して紹介することができたことに、刊行費を助成下さっている、大学院現代社会文化研究科に篤く感謝申し上げる次第である。

ピストリウス：シュルツェ著『カント『純粹理性批判』解説』書評(下)

..... 城戸 淳 訳(1)

F・H・ヤコービ：フィヒテ宛て公開書簡

..... 栗原 隆・阿部ふく子 訳 (33)

エッカート・フェルスター：カント以後の哲学の展開についての『判断力批判』
第76～77節の意義 [第二部]

..... 宮崎 裕助・大熊 洋行 訳 (133)

ヴェルナー・ハーマッハー：エクス・テンポレ——カントにおける表象
(Vorstellung) としての時間 (下)

..... 宮崎 裕助・清水 一造 訳 (189)

マルティン・ハイデッガー：現象学における、そして存在の問いの思索におけ
る時間理解について

..... 田中 純夫 訳 (213)

ダニエル・ブリージュール：良心に対抗？——ヘーゲル派の批判に対するフィヒ
テ派の返答

..... 重川 成美・栗原 隆 訳 (227)

ジョージ・ディ・ジョヴァンニ：1784年のメンデルスゾーン＝アプト論争——
人間の氏名をめぐる後期啓蒙の議論における一つのエピソード

..... 阿部 ふく子 (263)

あとがき

..... 栗原 隆 (291)

2014年度の『知のトポス』は、10年目を迎える。今後とも、思想史の展開に
おいて重要であるにもかかわらず、顧みられてこなかった文献の発掘に尽力す
る所存である。

(文責：栗原 隆)